

高 校

High School



高校生の「学びたい」を
育てて、つなぐ、
高大連携の
先にある未来

——最初に自己紹介を兼ね、高大連携に関わった経緯をお聞かせください。

高尾 桜美林大学入学部の高尾です。以前は中高生の留学を支援する企業で働いていましたが、点ではなく線で若い人の成長に関わりたくなり大学職員になりました。そこで「高校生にさまざまな体験の機会を提供しなければ」と考えるようになり、「ディスカバ！」というプロジェクトを立ち上げました(26ページ図1)。延べ約1万人が受講するなど、一定の支持をいただいていると思っています(※1)。

学に移りました。2007年ごろからは、各地の高校や小中学校と連携し、出前講義や模擬講義を続けています。

中村 島根県立吉賀高校で英語を教えている中村です。学校のある吉賀町は、小・中・高校と地域が一体となったキャリア教育を推進しており、その一環で本校でも東京の大学生と交流を続けています。個人的にも、人と人をつなぐことが大好きです。

延沢 山形県立東桜学館中学校・高校で国語を担当している延沢です。今は高2の学年主任ですが、進路指導一筋できました。私も人と会うのが好きで、大学の先生を含む全国の先生方と積極的に交流し現場に活かしています。

——ありがとうございます。それでは、改めて実践に込められた思いなどを順にお話いただき、質問や感想などがあれば発言していただければと思います。最初に高尾さんお願いします。

高校生が自分を知り、主体的に何かに取り組む機会を提供したい

高尾 はい。桜美林大学ではAO入試、今でいう総合型選抜の応募書類を、私を始めとした入学部の職員が目を通すのですが、志望理由や4年間の学習計画を自分ごととして書けている高校生と、そうでない高校生の二極化が進んでいることが数年前から気になっていました。高校時代に力を入れたこと



島根県立吉賀高校
教諭
中村美楠子

なかむら・みなこ ● 広島大学教育学部卒業。学生時代イギリスに留学。担当教科は英語。前任校の島根県立大東高校ではキャリア教育担当として先導的に「キャリア・パスポート」を導入。2019年より吉賀高校。



山形県立東桜学館中学校・高校
教諭
延沢恵理子

のべさわ・えりこ ● 高校教員初年度から教員生活のほとんどにおいて進路指導を担当。現在、キャリア教育を含む5つの研究会の運営事務局を担当。2016年より県内初の併設型中高一貫教育校である現任校に。中学1年から持ち上がり、今年度高校2年の学年主任。教科は国語。

※1 「ディスカバ！」受講生のインタビュー(13ページ)もご覧ください。



大 University 学

も、最近では「探究」に関する記述が増えています。少し前は判を押したように部活動の話ばかり。自分を振り返り、整理・言語化する機会が減っていることに加え、経験自体が少ないと感じました。このままでは本学が求める学生とのマッチングが難しくなるという危機感から、自己分析のワークショップに加え、各界の専門家や教員協力の下、グローバル、SDGs、AIなど多彩な体験プログラムを高校生に提供するようになりました。

延沢 「自己分析」が大切なことはよくわかります。生徒は、自分ががんばってきたことの価値に気づいていないこともあって、「面談してみると」「すごいじゃん」と思えることが実はたくさんあるんです。ただ、時間も限られるなか、教師側の経験の面でも、すべての生徒の良さを引き出しているかというとしさも感じます。こういう大学側の取組はありがたいです。

中村 自分を客観視できないという点では、うちの生徒も自分たちが住んでいる地域の良さに気づいていません。でも、後で話しますが、東京の大学生と交流するなかで「なんにもない場所だ」と思っていたけれど、こんな魅力があったのか」と気づくわけです。受験ガチガチの学校ではないため、総合型選抜を見据え、「自分はどんな経験をし、何に気づき、どうしていきたいか」を

それぞれ役割や目的があり、置かれた事情も異なる高校と大学とが本当の意味で連携するのは、簡単なことではないはず。これまで組織として、個人として、高大連携に取り組んできた先生方に、大学と高校から二人ずつ参加いただき、高大連携の価値や課題、そして高校生の未来について本音を交えながら語り合っていました。



桜美林大学
入学部 部長
高原幸治

たかはら・こうじ ●桜美林大学大学院 大学アドミニストレーション研究科修士課程修了。中高生を対象に国際交流や留学を企画運営する企業を経て、2002年学校法人桜美林学園入職。国際交流、改組準備室、就職支援、学生支援などの部署を経て18年から現職。学長補佐(入学/高大連携担当)。



国立大学法人九州工業大学
工学研究院 基礎科学研究系 教授
中尾基

なかお・もとい ●大阪大学大学院 工学研究科博士後期課程修了。博士(工学)。堀場製作所、大阪府立大学を経て2006年九州工業大学。副理事(就職支援担当)、キャリア支援センター長、PBL教育推進室長などを併任。小・中学校・高校を対象とした出前講義は150回近くに。

高校が変わろうとしている今、 では大学はどう変わるのか

(高原さん)

配を業者さんがすることがあります。でも業者任せにすると、どうしても生徒さんは受け身になってしまいます。

中尾 わかります。出前講義に行つて生徒さんが前のめりだと感じるののは、高校の先生が主体的で、生徒との信頼関係も厚いように見えるクラス。やらされている感が少ないのか、後からいただく感想も心に刺さるんです。

——中尾教授が十数年前から出前講義を続けてこられた理由は何でしょう。

「勉強＝つらいこと」という思い込みを外したい

中尾 正直、最初は大学の方針でノルマ的に始めたんです。それを見透かされたのか、物理や半導体の話をしてもらっても高校生は面白がってくれません。そもそも大学の教員は教育に関心がない人も多く、私も40代頃まではそうでした。やはり研究が楽しいんです。でも、教育改革の担当となり、PBL(図2)やアクティブ・ラーニングを取り入れることで学生が目に見えて成長し、教育にやりがいを感じるようになったんで

す。それに伴い出前講義にもPBLの要素を取り入れていきました。答えがある学びに慣れている子どもたちに、そうではない学びがあることを知ってほしいと思っています。

延沢 大学の先生つて研究に没入なさるじゃないですか。その姿を高校生が見て、「学びつてかっこいい、楽しそう」と思えることが大切だと思います。一方で、1の楽しさの裏には99の努力があるわけで、そこを見落とすと、「なんだ。大学に入つたらつまらんかった」となってしまうがち。なので「面白さつて、苦勞を背負つても向き合うこと

なんじゃないの」と伝えるのも高校教師の役目かなと思っています。

中尾 確かに、良い面ばかり見せてはいけませんよね。ただ、現実的なことを言い過ぎても、やる気が失せてしまう。バランスが難しいですが、個人的には「勉強＝つらいこと」という思い込みを外すことを優先したいです。

高原 「好きなことをしていれば、そのうち周辺領域で必要なことが生じ、学ばざるを得なくなる」と話す教員が

いました。意欲と学力はどちらも欠かせませんが、どちらかというところ最初は私も前者を重視したいと思っています。

異質なものとの出会いによって
価値観を揺さぶる

——続いて、中村先生。吉賀高校の実践(図3)と、それが生徒に与える効果についてお話しいただけますか。

中村 10年近く前、青山学院大学や法政大学の学生さんが田舎体験にきたことを契機に交流が続いています。うちには全校生徒100人強の小さな学校で進路も多様。大学進学者が3分の1という環境で、東京の大学生との交流にどんな意味があるかという、異なる背景をもつ人と接することで、地域や自分たちの学びに実はすごく価値があることに気づくわけです。例えば、河原での火起こしを大学生は悪戦苦闘しているのに自分たちはさらりとやつのける。そんなことから「自分は何が得意で、人にどう貢献できるか」といった自己分析や、「町のことをもっと知って良くしたい」という当

事者意識も生まれます。進学するしなに関係なく、いろいろなことを考える機会になっているんです。(※2)

延沢 そうした経験で、進路や未来が大きく変わるかもしれませんね。異質なものとの出会いは、それまで考えもしなかった可能性の扉を開くことなのかなと思いました。

中村 ですよ。当たり前と思つていた価値を一旦壊すことで、深い学びにつながる子もいれば、多様な人との出会いをきっかけに、地域の中でやりた

図1: 高原さんの実践

「ディスカバ!」

桜美林大学が提供する高校生向けキャリア支援プログラム。前身の取組を統合し2019年からスタート。コロナ禍の昨年も、グローバル、SDGs、アート、音楽、航空、観光、ウェディングなど70のプログラムをオンラインで開催。「探究体験」「世界探究」など探究を冠したプログラムも充実。一連の活動実績も踏まえ、2021年9月から新たな入試方式「探究入試」(Spiral)の出願を開始。高校の教育課程内外を問わず探究に取り組んできた高校生を対象に、探究学習のサイクルをどう回せたかななどを評価する。

本音を話すことが高大大連携の第一歩。
そこから何かが見えてくる (中尾教授)

※2 吉賀高校の生徒さんインタビュー(11ページ)もご覧ください。



学びをつなぐだけでなく、人と人とをつなぎたい

(中村先生)

いことを見つける子もいます。

高原 「デイスカバー」も、進学校から進路多様校まで幅広く参加してくれることが醍醐味の一つ。普段の教室と違い、異なる高校生との出会いは、価値観を揺さぶる効果がすごくあります。

中村 価値観が揺さぶられるのは大学生も同じで、卒業後、島根県で就職する学生さんもいて嬉しく思います。

中尾 研究室の大学院生も、ティーチングアシスタントとして出前講義に参加するたび刺激を受けています。特に小学生は好奇心旺盛で、「なぜ、どうして？」と質問攻めですからね。

皆さんの話を伺いながら、**高大連携**

て、携わる人すべての成長や、地域の未来などSDGs的なものにもつながると感じてきました。

互いにとって実りの多いWin-Winの関係をいかに築くか

——最後に延沢先生。個人としてさまざまな実践(図4)を行っていると思いますが、例えばどのような?

延沢 はい。例えば前任校では研究室訪問の「リメイク」を担当しました。生徒の課題研究と大学の研究室をマッチングしたかったんですが、それまでは大学の先生のご専門と関係なく地元圏を東日本に広げ、生徒の研究テーマに合った研究者をresearchmap(※3)で探し、一件ずつお願いのメールを送ったんです。大学側には、専門分野の後進を育てる点で喜んでいただけ、進学につながった例もあり、双方にとっていい取組になりました。私も、大学の先生方との縁ができました。

中村 私がいつも思うのは、高校のメリットだけを押しつけてはいけないとい

うこと。いかにWin-Winの関係にかミートイングを重ねています。

延沢 そこは気をつけたい点です。私は有志の研究会を複数立ち上げていて、大学の先生を招いてお話を聞く機会もあるため、大学の先生が置かれた大変な立場もわかってきました。なので、高校側の都合での無理なお願ひによつて、貴重な研究の時間を奪っているのでは、と申し訳なくもなるのです。

中尾 お気遣いありがとうございます。ただ、人に教えたり、一緒に考えたくなるなかで、新たな見方や発見につながることも多いんです。ノーベル賞受賞者の数が、研究機関より大学の教員に多いのも、日常的に教育に携わっているからではないでしょうか。そのうえで、先ほどの「高大連携って広い視野で行うもの」という話につながるんですが、残念ながら大学が行う出前講義って、高校生に大学の名を売る広報目的になりやすいんですね。そこは気をつけようと思っています。

高原 確かに高大連携は、立地や学力帯を含め関係性の強い高校に偏りがちになります。高校生の成長にフォーカスするべきなのに大人の思惑が介在するとややこしくなる。とはいえ、大学は学生募集につながるが判断材料の一つになります。「デイスカバー」も当初は本学志願者のみを対象にしよ

図2: 中尾教授の実践

PBL (課題解決型学習)

「大学教育は知識や技術の伝授よりも、個々の学生に適した方法論の習得と確立を重視するべき。その点、PBLは具体的な課題を設定するため、課題解決という目標に向かって意欲的に取り組むことができ、その過程で自分の方法論を獲得する」(九州工業大学PBL教育推進室)という観点から、中尾教授が中心となり2008年に本格導入。大学生向けのアクティブな学びとして実施してきたが、高校生や小・中学生を対象とした出前講義や模擬講義にも取り入れている。

図3: 中村先生の実践

アントレプレナーシップ教育

「吉賀町の人々と共に、吉賀町の未来を創る」活動を通して、自分自身や地域社会の未来を創る力をつけるための授業。地域の人々や卒業生、都市部の大学生と協働し、現実の社会を動かす試みを、総合的な探究の時間を中心に3年間かけてチャレンジする。キャリア教育としてだけでなく、ここ数年は探究色を強めた本格的な課題解決型学習を推進。小中高を貫く吉賀町全体の教育ビジョン「サクラマスプロジェクト」とも連動し、「小さな町の小さな学校」だからこそできる学びとなっている。

うと考えたことでもあります、思いとどまりました。結果として全国各地さまざまな興味・関心をもつ、多様な高校生が集う学びの場をつくることができました。

中尾 インターネットの枠組みも同じで、大学の思惑と企業の思惑があつて、目先の利益にとらわれると青田買いになる。そうした社会構造から抜け出さないといけませんね。

自ら手を伸ばし 自走するマインドを育むために

——実践をひと通り何ったところで、せつかくなので互いへの要望があれば。

中尾 工科大系の大学の教員として少し気になることがあるのでいいですか? 探究というキーワードで高校生の発表

図4: 延沢先生の実践

高大連携に関する
5つの個人的取組

- ①学びのきっかけや憧れづくり(キャンパスツアー・出前講座等)②生徒の研究テーマと研究者をマッチングした研究室訪問や課題研究③授業コラボ(例えば、鲁迅の単元で文化人類学者を招く等。知識の有無が「読み」を変える経験をさせるねらい)
- ④非認知能力や高校版IRなどの共同研究⑤入試改革や高大接続をテーマにした研究会の企画運営(「全国女性進路指導研究会」等5つの研究会運営に携わり、全国の教育関係者や大学教員とつながる)。

が行われることが増えましたが、全体のレベルが落ちた印象があるんです。以前は、SS日の課題研究や、科学部や生物部の生徒さんを中心にワクワクする発表が多かったんですが…。全員で探究しようとか、入試でそれを評価しようという流れのなかで、逆に尖がった高校生を埋没させることにはならないでしょうか？

延沢 人つて多様なんだから、やり方は違っていいはずなのに、教育の世界って「みんなでやろう」となりがち。良し悪しはともかく、みんなであれば当然、平均値は下がりますよね。

高原 本気で取り組みたいテーマなのかどうか大きいでしょう。エンジンがかからないと探究も「やらされ感」満載になりますから。ただ、高校のキャリアラム内で大学生顔負けの研究をしようと思うと限界があるため、「この辺までは正課の時間でやって、その先

は大学のリソースを使い、ここは自身でやり遂げる」といった組み合わせを、周囲の助言を受けつつ生徒さん自身が考えなければいけないと思います。

中村 探究の質を本気で高めようと思つたら個別最適化を進めていくしかなく、そこそそ外部の力も必要になります。ただ、一般の高校でできることは、課題を見つけ、それに対してどうしたいかを考え、自走できるように準備するところまでかな。でも、それができるとすごいことですよ。

延沢 私も、自分から手を伸ばせるようになることが大切だと思つています。それさえできれば、受験も、その後の学びも自分の力で乗り越えて行ける気がします。高校と大学の違いは何かといえば、「教えてもらうマインド」から「自分で学ぶマインド」に変わることについていますよね。今は、高校でも探究やアクティブ・ラーニングなどを通じて、そういうマインドに切り替えやすいのでは？

中尾 私などはつい研究の中味を問いますが、もっとゴール地点を低くして、学びに向かう態度に注目すればいいんですね。「大学は自分で学ぶ場所。そのために高校までに何を身につけておけばいいか」といったマインドを理解してもらうだけでも高大連携の意義はあるのかもしれない。

単につながればいいのか、
何のために、どのようにつながるか
(延沢先生)

育てて、つなぐ。その先の未来

——最後に、これからの高大連携で大事にしたいことをお話しください。

中村 地方の小規模校を代表するながら、学びをアカデミックなものにつなぐだけではなく、人と人をつなぐことが大切だと思います。大学生や大学の先生に限らず、身の回りの人とも幅広く交流しながら、地域の持続可能な新しい形を考えられたらいいな。ICTによって地方と都市部をつなぐことも容易になってきたので、多様な人と一体となつて課題解決していくような高大連携を模索していきたいです。

中尾 大学の人間としては、一部の教員ではなく、数多くの教職員が、もつと高校の先生や高校生と接する機会をもつべきだと思います。それによって、気づかなかつたものが見えてくるようになる。まさに本日の座談会のように、互いの本音を話してみることが、

高原 高大連携の一步だと思いました。探究を柱とする新学習指導要

領によって高校が変わつていったときには、大学はどう変わるのか。高校生に「なんだよ」とがっかりされるのではなく、「やはり大学の学びは面白い」と思ってもらえるよう、大学の価値について考え続けていきたいです。

延沢 改めて、単につながればいいのかはなく、何のために、どのようにつながるか大切だと思いました。今日の座談会のテーマに「育てて、つなぐ」とありますが、それだと教師が主語になりかねないですね。生徒が主語になることなしに、高大接続はありえないのではないのでしょうか。

あと、やはり大学は大学でいてほしいとも思うんです。大学でしかできないこと、高校でしかできないこと、そこを曖昧にしたままだと乗り越えるべき「ステップ」が、「スロープ」になってしまい、成長を阻害する可能性もあるのでは。今後は、高大接続の連続性のみならず、非連続な設計にも目を向けて、互いがなすべきことの違いが大切だと思えました。貴重な機会をありがとうございました。